

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：AA 研共同利用・共同研究課題「アジア文字研究基盤の構築(2)－文字学に関する既存術語の再検討」

2020 年度第 1 回研究会

日時：令和 2 年 7 月 4 日（土曜日）午後 13 時 30 分より午後 17 時， 7 月 5 日（日曜日）午前 8 時 30 分より午後 14 時

場所：AA 研 304 室，及び Zoom

報告者名（所属）

7月4日

1) 荒川慎太郎（AA研所員）

「本課題について」

(On the joint-research project)

第 2 期，及び今年度の活動計画を説明・検討するとともに，研究会の完全オンライン開催について試案を示した。

2) 岩佐一枝（AA 研共同研究員，名古屋外国語大学）

「彝文字・彝語文献研究の今（2020）」

(Current studies on the Yi script and manuscripts (2020))

まず，彝文字に関する先行研究の概要，並びに，文字の構成要素が特に決まった意味や音価を示さない，個人の裁量に大いに依拠し，文脈依存性が極めて高い文字体系であるといった，彝文字の性質に起因する研究の難しさを指摘した。続いて，彝文字は異体字が多く，地域差も大きい，それでもなお彝文字としての統一性も留めているという点に言及。目下，その要因となっているものが何かを探り，彝文字の伝播過程及び変遷過程を解明すべく，地理言語学的アプローチを用いて，語彙項目ごとに彝文字地図を作成し，分析を進めているといった最新の研究状況を紹介した。

3) 荒川慎太郎（AA 研所員）

「西夏文字のとある 5 画部首の再考と再分類」

(Re-analysis of the Tangut radicals which have 'five' strokes)

西夏の部首の中に従来「5 画」と分析されるものがあつた。報告者は，その中にひらがな・カタカナの「くくノ」を縦に組み合わせた，つまり「3 画」の筆画が含まれることに気づき，西夏時代の字典類から当該の部首を調査した。結果，「飛ぶもの」を示す「ノメメ」型部首と，「程度の大きいもの」を示す「くくノ」型部首が併存し，異なる意符であること，それぞれ偏以外の位置でも同様の意符となると分かった。

7月5日

4) 全員 文字研究の術語に関する討議 (1)，文字研究の術語に関する討議 (2)

午前午後，文字研究の術語に関する討議，特に文字の筆画，「点」に関してそれぞれの文字研究の見地から実例とともに討議した。

また，2020年度第2回研究会に関する打ち合わせを行った。

今回は半数の参加者がZoom参加となった。会場参加者はマスク着用，席を離すなど，コロナウイルス感染予防に努めた。書画カメラなどのデバイスの良い実験にもなり，有意義な研究会とできた。